専門学校生におけるリアリティショックに関する研究
—大学生を比較対象として—

渡　邉　慶　太

1．はじめに

日本の高等教育機関における退学率は，諸外国に比べて低い水準にある。しかし，日本では退学者が少数であることから，退学という行動に対する評価が低い。高等教育機関の中では，専門学校の退学率が最も高く，その状態が長期に続いていることから，専門学校においては退学防止につながる有効な方策が求められている。

吉本（2003）は退学要因として，専門学校の特徴である「しつけ」を含めた学習指導の徹底が，若者の価値観やその背後にある若者文化との葛藤を引き起こしていることを挙げている。しかし，学力水準が退学率に影響しているという調査もあることからも，教育方法や教育環境の相違だけが，必ずしも退学の原因と明確にされているとはいえない。

そこで本研究では，教育機関や学力水準の違いが，退学と関連があるとされる学校満足度にどのような影響を及ぼしているのかを比較検討をする。

2．先行研究レビュー

退学を含めた高等教育研究の対象は大学が中心となっており，専門学校を対象とする研究の蓄積は限られている。このため、蓄積の多い大学生を対象とした先行研究に依拠することとした。

大学生の退学の多くは，学校生活への適応問題が影響している。また，学校不適応に陥る原因の一つに，入学前に抱いた期待と入学後に経験する現実とのズレがあげられる。よって本研究は，このような自己不一致を測定する尺度として構造次元が明確となっているリアリティショックに関する尺度を用いることにした。

3．研究対象と方法

研究対象は，情報系学科に所属する４校の大学生，２校の専門学校生の１年生合計423名である。また，大学は学力による入学者選抜が機能しているＡ大学２校と機能していないＢ大学２校を選定した。研究方法は，アンケート調査による分析に加え，得られた結果の原因を検討するために，対象とした学校の教員等関係者にヒアリング調査を行った。

4．アンケート調査の結果

調査の結果，①リアリティショックは学業面・非学業面ともに，大学生と専門学校生とで感じ方が異なっている。②リアリティショックの尺度項目と学校満足度から見ると，専門学校生とＢ大学生の意識は類似しているが，両者とＡ大学生とはa）学業面b）教職員との関係c）学校満足度の３点で有意差が見られ，Ａ大学生はこれらに不満をより強く抱いていることが明らかとなった。

本研究では，先行研究に基づき「入学者の学力水準の低い教育機関の入学者は，リアリティショックをより強く感じ，その結果学校満足度が低く，これらの教育機関における退学率の高さを招いている」と予想していたが，この結果ではそれと相反する結果となった。

5．ヒアリング調査の結果

ヒアリング調査から，「学業に対する学生の意識」と「学生と教職員との関係」の両面で，専門学校とＢ大学においては共に講義時間のみならず，講義時間外においても教員と学生が密に接していることが確認された。手厚く，きめ細やかなサポートが彼らの学校満足度を高める成果となっているといえよう。一方で，教員の持つ学生の印象として，「諦めが早い」，「自信が無い」といった者が多く見受けられている。

Ａ大学では教員と学生は疎の関係にあり，学業に対する学生の意識も不満が多い。また，Ａ大学生の学校満足度は低い結果である。しかし，教員の持つ学生の印象として学生は「受験勉強から得た達成感」や「努力を無駄にしたくない」，「やればできる」といった気持ちが強い者が多く見受けられている。

6．むすび

本研究の結果から，専門学校生とＢ大学生では，手厚く，きめ細やかな人的支援がリアリティショック軽減につながることが明らかにされた。しかしこれらの学校の退学率は高く，人的支援によって得ている学校満足度が在学中に低下している可能性も考えられる。専門学校生やＢ大学生には，Ａ大学生に見られている自分自身を信頼するといった自己効力感が弱いことが推測されよう。そこで，今後，自己効力感と学校満足度との関係にも注目し，心理的側面から検討する必要がある。これらを本研究の今後の課題としたい。

吉本圭一（2003）「専門学校の発展と高等教育の多様化」『高等教育研究』日本高等教育学会 第６集，pp83-103.